

ワークショップを終えて

中山 大将 (NAKAYAMA Taisho) *

本ワークショップの特徴は、日本と中国の大学間の若手の国際的ワークショップであるということです。2011年に第1回のワークショップを行なった大きな動機は、中国の院生の研究状況を知りたいということでした。国際学会などに中国の大学の院生が参加するのは稀で、国際学会へ行っても中国の院生と交流できる機会はほぼありませんでした。また、エラスムス計画で南京大の院生と共同調査をする機会があったのですが、調査に集中しお互いの研究について深く知る機会がありませんでした。このため、2011年のエラスムス計画時に南京大学の張玉林教授にお願いして交流のためのワークショップを開いていただきました。60人近い来場者があり、相手のことを知りたいのは我々だけではなかったということに気付かされました。

翌年度もワークショップを南京大で開催することができました。このときはちょうど尖閣国有化後の反日騒動の時期でした。南京入りする前に、私は北京、天津などを回り宿泊拒否に遭うなどこの反日騒動を身を以って体験いたしました。今でもよく覚えているのはこのときに、街角でアングロサクソン系の白人を見かけた時のことです。私は深く鮮明な安堵感を覚えました。価値観を同じくする仲間がそこにいると感じたのです。東アジアなどという枠組みが自動的になにかしらの紐帯を保障してくれるわけではないと実感した瞬間でした。もちろん、南京大のみなさんはなに変わりなく我々を温かく受け入れてくださいましたし、北京で自宅に泊めてくださる方にも出会えました。愛知の者同士の連帯感と信頼感、人の人に対する温かさの重要性を痛感いたしました。顔の見えない相手への憎悪というものは、ヘイト・スピーチに象徴されるように日本においても深刻な問題です。

こうした経緯もあり、その翌年度にはぜひとも京大で開催してみたいと我々思うようになりました。南京大の若手に若いうちに実際の日本社会に触れてほしかったのです。そして平田教授に相談したのです。いま思えば無謀な相談です。南京大の院生を呼びたいからお金を用意してくださいとお願いしたのですから。それでも平田教授は我々の意を汲んでくださり、大変なご尽力をなさってください、こうして3年度にわたり京大での開催が実現いたしました。平田教授はこのワークショップの大恩人です。

本ワークショップのもうひとつの特徴は、日中両語を使用言語としていることです。このため、通訳や翻訳には膨大な労力を割きました。京大側も中国研究者に参加者を限定して中国語に使用言語を統一すれば大変に楽だったかと思います。しかしそうしなかったのは、中国研究をしていない若手にも参加して、中国研究について知ってもらいたかったのと、南京側の参加者に中国以外の地域の研究について知ってもらいたいという背景がありました。

また英語で統一しなかったのには、ふたつの理由があります。中国人留学生の多くは、留学前あるいは留学後に日本語習得に傾注しており、これら留学生の能力を活用できるからです。ふたつ目は我々の交流の成果を学外の人々へもより多く届けるためです。確かに英

* 京都大学地域研究統合情報センター、助教、京都大学博士（農学）。

語の方がより多くの人々に届くかもしれません。しかし、日中の若手の交流の成果をまず知って欲しいのは、やはり日本語や中国語に慣れ親しんだ人々だと思うのです。

今回のワークショップでは三つの新たな試みを行いました。ひとつは、南京大学以外からも海外からの参加者を招いたことです。特に台湾からの若手を呼ぶことで、より広い視野で東アジアの学的状況を考えるきっかけになったと思います。ふたつ目は討論会を行ったことです。個々の若手研究者がどんな研究を各自行っているのかを知ることもちろん大切ですが、若手研究者として同世代の研究者が何を考えているのかを知ることが、我々が未来を共有していく上で重要な一歩であると考えたのです。そして実際に多くのことを共有していることを見出すことができました。

これまでの 5 回のワークショップを通して改めて思うのは、お互いのことを知りたいと思うこと自体が、我々が未来を共有していく上でとても重要なことであるということです。

本ワークショップの開催にあたっては、多くの方々のご協力を得ました。心よりお礼を申し上げます。